

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.103  
2012.4.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

24

## 「戸沢充則さんと歩く 調査する」

私の考古学は同世代の学友に支えられて育った。考古学のイロハは今村賢司さん、深さ・楽しさは戸沢さん、人との結びつきは塚田光さん、豊かな発想は桐原健さん、心の豊かさは樋口昇一さん、中でも戸沢さんとの10代後半の5年間は私に強い影響なった。いつも目標のライバルであり、あって話せば一歩以上先に行っていて悔しかった。

出会いは藤森栄一先生宅であったと思う。親しくなったのは昭和24年(1979)12月1日 塩尻市での中南信学生考古学会準備会と思う。戸沢さんは諏訪清稜高校3年、私は飯田高校2年、このとき松本県ヶ丘高校3年桐原健さんも出席していた。翌年1月28日戸沢さんは下伊那の私の実家に泊りに来たのが初めて、毎年2~3回 来れば数日泊って下伊那の各地を歩き、小さな発掘もした。立野遺跡と北原遺跡の発掘が記憶に強い。立野遺跡の調査では諏訪から3人、東京から2人の5人が我が家に泊って、戸沢さんが岡谷市下り林遺跡の経験でロームまで深く掘ればと言ひ、掘り下げたら多数の押型文土器が出土した。これが学界に残る発見となった。今考えると5人も泊っての世話に母はよく接待してくれたと思う。我が家には神田五六先生・大場磐雄先生も泊ってくれた。北原遺跡は表採資料を基に二人で『諏訪考古学』に纏めたが、調査してみたくなり戸沢さんと郷土班の仲間とトレンチを入れた。住居址に当たって弥生中期の壺・甕を検出した。この2遺跡の調査が私の押型文土器・弥生土器の根幹テーマとなった。

諏訪に出かけた時は藤森先生宅か戸沢さん家に泊った。26年曾根湖底遺跡、27年樋沢遺跡・茶臼山遺跡、28年新道遺跡があり、それぞれ特徴ある遺跡で時期・

遺物が違っている。特に茶臼山遺跡が強く印象に残っている。

茶臼山遺跡は松沢亜生さんが工事現場で発見し、藤森先生に連絡、ついで戸沢さんにも。早速駆けつけた戸沢さんは岩宿遺跡とは違った旧石器ということで戸沢さんに電話した。私は戸沢さんからの連絡で共に諏訪に行った。戸沢さんは石器を見て驚喜し杉原先生に連絡した。私・戸沢・松沢の三人は遺跡に上がり残丘をツルで崩した。不思議と石器有る所で崩れ、ローム面に潤んだ黒曜石石器が姿を見せた。藤森研究室では戸沢さんと杉原先生が石器をみてカタカナ語で分類するのを見て藤森先生はよく分からず戸惑って居られた。遺跡調査について両先生の間にやり取りがあり、私達は居づらく戸沢家に逃げた。杉原先生・戸沢さんが東京に帰ってから3人で完掘した。茶臼山遺跡の黒曜石主体の旧石器は学界から注目され、戸沢さんはこの石器群をテーマに卒論を書き、旧石器研究者となった。松沢さんは技法・手順の研究者となり、私は英語が苦手なので旧石器から遠去かった。

高3の時 戸沢さんと下伊那南部阿南地方を歩き新野で宮坂英弼先生の息子昭久さんを訪ねた。ここで戸沢さんがホームシックにかけり諏訪に帰るが、私は足を伸ばし奥三河を歩き夏目一平さん・伊東正松さんを訪ね所蔵遺物を見せてもらった。

大学2年夏 7月4~11日の8日間 静岡・愛知両県の山間部の遺跡に遺物を求めて歩いた。西志賀貝塚の発掘参加に課題を持行こうと、戸沢さんは庄の畑遺跡の浮線網状文土器の西漸を、私は林里遺跡の条痕文土器の淵源を辿っての調査歩きでした。幾つもの遺跡・遺物をみての、所蔵者宅に泊っての考古学談義が懐かしい。この調査がキッカケで私の卒論は条痕文土器となった。

3年冬 戸沢さんの退学騒ぎがありシガレットケースを皆で出し合った金で買って渡した。4年4月大学に行ったら藤森先生・杉原先生の説得があつて戸沢さんがいた。その時から二人の間に見えない心の隔たりが生じた。が 私にとって15~19才の5年間に一番影響を与えたのは戸沢さんだ。感謝あるのみ。



1952.11 茶臼山遺跡発掘



1953.7 静岡県半場遺跡

\*巻頭連載は隔月です。次回からは塚本師也先生の新連載が始まります、お楽しみに。

## 目次

■田舎考古学人回想誌	戸沢充則さんと歩く 調査する	神村 透 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイスレット・サイト(第96回)	遠部 慎 …3
■考古学の履歴書	公務員としての考古学研究者(第3回)	石井則孝 …2	■考古学者の書棚	『原始社会』	野坂知広 …4

## 考古学の履歴書

## 公務員としての考古学研究者(第3回)

石井 則孝

## 《日本考古学協会図書問題に寄せて》

## はじめに

今、手元に昭和48年1月20日(1973)現在の協会々員名簿がある。会員数は640名(2012年1月は4000名を超えている)。昭和50年度(1975)の委員を記すと麻生 優・石井則孝・石附喜三男・大井晴男・岡田茂弘・乙益重隆・加藤晋平・神村 透・菊地徹夫・久保哲三・小林三郎・潮見 浩・重松和男・嶋田暁・鈴木公雄・田中琢・田中義昭・都出比呂志・西谷正・早川智明・森浩一の21名となり、在京委員が9名であった。

規約改正で、現在は法人となり、委員と称していたものが理事に変更されている。現在は理事会があると全員集合し、九州からでも北海道からでも全員に交通費が支給されている。しかし、かつては貧乏協会であったので交通費支給など考えられず、全員が手弁当で動いていた。従って遠方の委員は大変なので、在京委員会制度が作られていて、東京・埼玉・千葉・神奈川在住の委員が毎月都内の大学に集まり委員会を開催していた。

## 1、協会事務所と事務局体制

事務所は、東大の考古学研究室にあり、長い間藤本 強さんがその任に当たっていた。その後、昭和45年(1970)年頃だったか、東大赤門正面にあった赤門ビルの一室を借りて事務所として使用していた。事務局員として、田村晃一さんの教え子渡辺真澄(旧姓長谷川)さんが留守番をしていた。今考えるとゾットするようなビルで、若い女性が良く一人で居られたもんだと反省している。土曜日には、なるべく顔を出すようにしていた。狭い一室で、蔵書など置ける余裕などなかったので、年報を一括して拙宅で預かるため、スバルサンバーで、何回かに分け運んだものだった。500冊くらいはあったであろうか。これが図書問題のスタートである。

その後、会員の一人である目白駅近くのKさん所有のマンションの一室を確か20万円のところ半額にしてもらって10万円だったと思うが委員が集まって会議のできる事務所を設けることが出来た。現在の平井駅前へ引越したのは何時だったか私は知らないが、目白に6・7年いたのではないだろうか。会員の増加に伴い事務局体制の整備を行い、会員の中から事務局長を置くことになりその第1号が古山 学さんであった。このような事情の中で今年3月停年になる事務局員の酒井さんにはどんなに助けられたか会員一同胆に命じて感謝しなければならない。

## 2、荒れた総会・大会について

協会解体を叫ぶ全共闘の一部学生たちによる騒動が、平安博物館事件、開催できなかつた浦和の総会、竹筒の攻防による豊島公会堂における暴力事件(高島忠平さんはメガネを飛ばされ顔を負傷、会場内はバルサンを燃れ、大川 清さんの『この不逞の輩出て行け!!』のドナリ声等々)結局総会は開催できなかった。この年の秋の札幌大会は、関係者全員一生忘れられない騒動として記憶されているだろう。とにもかくにも協会事務局のお金は、会費をもらわないので0円、仕方なく久保哲三さんは自分個人の貯金通帳をもって札幌へ行った。

総会が始まったら灰皿叩きの大騒音、さらに、壇上のマイクを私と学生とが奪い合い、私は会場担当委員であったので、灰皿の方はあきらめマイクだけは死守すべくがんばり、私の方が学生より腕力が強かったので、学生は最後にはあきらめ壇上から離れていった。私はマイクを持ってしゃべり続け、北海道大会の責任者であった千代 肇さんもがんばってくださり、この騒ぎはなんとか午前中で治まった。

午後からの研究発表会は順調に進行し、夜の札幌ビール園での懇親会は、午前中の件があったので出席者全員が喜び、大変な盛り上がりで大ジョッキがどんどんと空となっていった。

当時、本州から北海道へ渡るのには、長時間の列車を乗り継ぎ、青森からは青函連絡船で函館まで渡り、それから又列車に乗り札幌へとめざしたものであった。時間とお金がどのくらいかかったかは忘れたが、会員一人一人色々とう工面して北海道へ駆けつけたのであった。

## 3、お金と図書の問題

北海道大会後からは、青山学院だったか駒沢大学であったか、春の総会は順調に開催されるようになった。しかし、協会のフトコロは相変わらず貧困で、開催校や手伝いの学生へのお礼が出来ないので、編み出したのが年々高まっていった図書交換会であった。一卓何がしかの金子をいただくことによって、会場費を生み出すことであった。20万円近く集めた記憶が残っている。と同時に、協会へ一冊ずつ寄贈図書もいただくことにした。(これは後に、会場校へも一冊寄付ということで行われている。)これが、年2回の集本体制が出来、蔵書が大量に出来てしまった主な原因である。(会員資格審査でも相当量の本が寄付されている)昭和50年代前半より、自治体組織の埋蔵文化財センターが設立され、日本列島改造の動きに伴って列島全体が発掘ブームとなり、考古学関係にお金が廻るようになり会員数も激増していった。

私が都埋文に勤務していた時、多摩市のパルテノン多摩を会場として春の総会を開催した。この時は都教委から100万円という大金の補助金をもらい余裕をもって開催できたことを記憶している。昭和60年(1985)頃には、考古学にとって社会情勢が良くなり協会財政も解決していったと思われる。

## 4、市川市博へ協会図書の収納

図書問題に話を戻すが、私が委員時代に、市川市立考古学博物館が完成し、市に出向していた関係から熊野・堀越両氏と相談の上、たまってしまった協会図書を、たまたま一室が空き室になっていたので無償で預かることにした。しかし堀越さんが停年退職になる頃には満杯となってしまい、協会は仕方なく、

略歴	
1936年	東京鷺宮に生まれる
1964年3月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士了
同年3月1日	文化財保護委員会記念物課(現文化庁)へ入省
同年5月1日	奈良国立文化財研究所平城京跡発掘調査部へ異動
1970年4月1日	千葉県教育委員会へ異動
1980年4月1日	東京都教育委員会へ異動
1996年7月15日	東京都埋蔵文化財センター所長で定年退職。公務員生活終了
この間、筑波大学・早稲田大学等9大学の非常勤講師を歴任。昭和女子大学は70歳定年まで22年間勤務	
2001年4月1日	帝京大学文学部専任講師
2007年3月	定年退職

埼玉の運送業者の倉庫へ預けるようにした。

図書預け料金も年々増加の一途、関係者は何を考えているのか。奈文研・榎考研、帝京大山梨研究所等、協会図書をいただいているところがあった。何故理事会はそうしなかったのか。一時期、協会のA理事は、懸命に空き校舎をはじめ倉庫さがしに走っていた。他の理事に危機感が欠けていたのでは。何時から理事が各種会議への出席者へ旅費を支給するようになったのか？ 会費収入4000万円の内、20%近くが旅費で消えていっている。

## レーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 96

#### 犬島貝塚 ～ 岡山県岡山市

遠部 慎

岡山県岡山市東区に所在する犬島諸島は、犬島・犬ノ島・地竹ノ子島・沖竹の子島・沖鼓島からなる。私が紹介する犬島貝塚は、地竹ノ子島という無人島に存在する縄文時代早期の貝塚である。

私は縄文時代前半期の研究を行ってきたが、中でも押型文期の貝塚について、多角的に検討を重ねてきた。そうした中で、瀬戸内海の黄島、黒島貝塚などの資料調査を経て、豊島：礼田崎貝塚にたどり着いた。瀬戸内海の縄文時代早期に汽水から鹹水にかわることは古くから知られているが、それが豊島と黄島、黒島では出土した土器、貝類の組成、年代測定結果から明らかに時間差があることが、礼田崎貝塚を中心とした研究成果から明らかになってきた。その後、改めて関連する研究対象として、いくつかのイニシャル「I」のつく遺跡が候補としてあった。その1つが冒頭で述べた犬島貝塚であった。

犬島貝塚は、岡山市西大寺在住の考古ボーイが1970年に発見した。貝塚として、遺跡地図などにも記載されるものの、「名称」はつかないままであった。その後、紆余曲折を経て、ふとした会話の中から、その実在を知ることになった。

黄島貝塚、小島貝塚などは史跡化され、黒島貝塚・礼田崎貝塚などはほぼ調査されつくしており、誰も手を付けたことのない貝塚がこの瀬戸内海に眠っているように、まさに想像もしていなかった。勿論、少しでも可能性のある場所についても、可能な限り踏査していた。その多くは、消滅ないしは別時期の所産であった。それゆえ、たとえ存在するとしても、小規模なもの、というこれまでの調査記録に納得していた自分がいたことは間違いない。

そうした中、貝塚から得られた資料を調査した結果、いわゆる黄島式以前と考えられる資料がまとまっており、貝類が伴うのであれば、少なくとも岡山県最古の貝塚であると考えられた。その現地がどうなっているのか、急ぎ、現地を確認する必要があった。資料調査から1月。発見者や有志を募り、巡検を実施した。その中に犬島関係者もいた。この方の実家で調査のたびにお世話になっている。現地に行き、はじめて貝塚を見た時の感動は忘れられない。崩れ落ちた断面に露出したヤマトシジミの貝層は7m以上あり、その時点で瀬戸内海の汽水性貝塚としては、屈指のレベルであるとわかった。

この貝塚の研究および保護ができれば・・・とは思っていたものの、無人島にいくための「船」「費用」「人」、ありとあら

## おわりに

財政問題は重大な問題である。札幌大会の時の会長であった乙益重隆先生は、仲間の委員を称して戦友という言葉を使っていた。今の若い会員には戦友という言葉が解らないであろうが、平和ボケこそ大問題である。

東北大震災後、奈文研はすぐに文化財の被害状況の調査に行った。縄文貝塚は全て大丈夫だった。それは何故か？ 縄文人の知恵をこの際学んで欲しいものである。

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。



犬島貝塚遠景(地竹ノ子島)

ゆる課題が山積であった。特に、調査にあたっての手続き・準備については多大な困難があった。ただ、地元の財団をはじめとする助成や、マスコミ、多くの方々の支援を受けて、なんとか2011年9月まで5次にわたる調査活動を続けてきた。その結果、いわゆる汽水性貝塚としては縄文時代早期の瀬戸内海でトップクラスの保存状態で、少なくとも岡山県最古の貝塚が、前方後円墳によって覆われていることが明らかになった。

そして、貝塚の存在を2006年秋に知ってから、ほぼ5年を経て、いわゆる発掘調査としての作業は終了し、次の段階へ進む計画であった。その矢先の2012年について貝塚の崩落が始まった。現在、詳細な検討中であるが、約7mにわたって、貝層およびそれを覆う前方後円墳の前方部が失われた。調査終了後、調査者が現地を継続的に訪れることは、感覚的にだがないと思う。しかし、私達は調査段階から遺跡の重要性を訴え、公開に努めてきた。そして、調査後も継続的に島に関わっており、その一環でこのような事態が判明し、比較的早急に対応に動いている。

内海離島における遺跡保護の問題はこれまであまり議論されていない。周辺の島々でも、様々な遺跡調査が行われてきているが、振りかえられることは少なく、「振り向けば未来」ではない。少なくともイニシャル「I」の島については、そうやってほしくない、と思う。しかし、この犬島貝塚でさえ、少し前までは名称さえついていなかったことを思えば、予断は許されない。ならば、この貝塚の歩みこそが新たな可能性を見出すことに繋がるように思えてならない。

思えば、調査を継続する間に私は3つの職場を体験している。そのようなこと自体、ありえないことだとは思いますが、なんとか続いている。その経験をさせてくれた貝塚および関係者には感謝している。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは岡嶋隆司さんです。

## 考古学者の書棚

## 「原始社会」

角田文衛／弘文堂 アテネ文庫(1955)

野坂 知広

本書は、昭和30年(1955)に刊行された総80頁の文庫本である。たとえ考古学研究者であっても、30代以下の年代の方々には馴染みの薄い一冊であろう。かくいう筆者も、本書を探そうと思って手にしたのではなく、古書店で偶然見つけたのであった。

現在我々は、一般用語としても学術用語としても、「原始」なる表現を使うことはあまりないが、昭和30年代当時は、文明社会に対する原始社会という理解をしていたのであり、未開社会と同義語のように使われていたのである。では、本書でいう原始社会とは何か。むろん、原始社会とは、原始時代の社会であるが、著者は「角田史学」とも呼ばれる独自の史観を確立させた考古学者(歴史学者)であり、本書でも「原始」や「先史」、あるいは「歴史時代」などの用語を痛烈に批判する。ただし、一般読者の利便のために、「致命的欠陥はあるけども、今はしばらく従来の慣習に従い、それを古代史のうちの古い部分と解しておくこととしたい。」と述べ、世界史における人類の誕生(人間の形成)から都邑文化の成立までを概説するのである。なお、著者は歴史を古代・中世・近代に大きく三区分しており、現代をも近代後期として理解する。古代は、始原・古拙・古典時代にさらに三区分され、本書で扱う時代は始原時代と古拙時代である。旧石器時代とか中石器時代とか利器の材料や製作技術によって時代区分をすることはなく、前述したように文字の有無にも大きな意味を見出さない。重要なのは人間の生活様式であり、大きく獲得経済と生産経済に分け、獲得経済の時代を始原時代、生産経済(農耕・牧畜)が始まり、定着していった時代を古拙時代というのである。

本書は、あくまで一般読者のための小さな概説書であり、頁数は極めて限定されたものである。その内容も我々が高校の世界史教科書で習ったものを大きく逸脱することはない。にもかかわらず、筆者がこれを紹介するのは、これほどに透徹された史観によって、しかも簡にして要を得た文章力でもって古代史の基礎を概説してくれる書物が他に見当たらないからである。もちろん、本書は昭和30年(1955)に刊行されたものであり、その内容には当然古さがあるが、物事の本質を一言で説明する文章はいまだ刺激に満ち溢れている。

たとえば、「数十万年に及んだ始原時代において人々が専ら狩猟に従事し、放浪的生活を送ったとはよく説かれるところであるが、これは非常な誤解である。」と述べ、考古学的事実に則れば、積極的狩猟の形跡は見出せないとする。また、獲得経済の文化が極限にまで発展した始原時代後期末葉に

起こった気候変動(自然環境の大きな変化)により、危機に陥った人々が農耕や牧畜を発明したといい、「人間の発展は、この危機の巧みな克服によって始めて可能であったのである。」と述べる。さらには、「歴史の発展のためには、余りにも恵まれた自然環境は有害である。」として、「文化の発展のためには、生活の適度な苦しさが必要であって、現状への不満が発展の基本的な契機となるのである。」と総括する。

これなどは聞き慣れた一般論であるが、一般論を説得力をもって言えることが実は稀有なことなのである。農耕とは単なる植物栽培ではなく、穀草を中心とした植物栽培であり、牧畜とは単なる家畜の飼育ではなく、有蹄類動物の飼育であると言い切った一般概説書がどれほどあるだろうか。

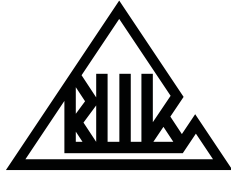
また、本書は常に世界史的視野に貫かれており、日本列島についても、縄文時代を「典型的な、しかしそれはそれなりに発達した停滞的始原文化であった。」と述べ、弥生時代に至ってようやく古拙文化を育成し、世界史の落伍者たるを免れたと結論づけている。

余談ではあるが、著者は「ある文化が始めて検出された遺跡、またはある文化の標準的な遺跡の名をもってその文化を呼ぶのが常である」との世界史の常識に従って、我々にとっては聞き慣れた「縄文時代」の呼称を否定している。旧石器時代(先土器時代)は岩宿時代、縄文時代は大森時代、弥生時代はそのまま、古墳時代～奈良時代は大和時代と呼ぶことを古くから提唱しているのである。もし著者がまだ存命であれば、「縄文遺跡群」を世界遺産に登録しようなどという運動を鼻で嗤ったであろう。

本書の最後には、生産経済の発明が人間に急激な発展をもたらしたと、しかし年代的に見れば最近5000年の文明時代は歴史全体の極小部分に過ぎないことが述べられており、いわゆる原始時代の間に、人間の発展に必要な基本的条件はすべて準備されたとする。近年、基層文化なる用語がよく聞かれるようになったが、本書の文末は、「これすなわち歴史の大局的把握のために、遠古史の研究が特に要望される所以なのである。」と結ばれている。

## アルカ通信 No.103

発行日 2012年4月1日  
 発行人 角張淳一  
 発行所 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.104  
2012.5.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## 阿玉台式土器 — 東関東に花開いた特異な中期縄文土器 — 塚本師也

### 第1回 阿玉台式土器とは(1)

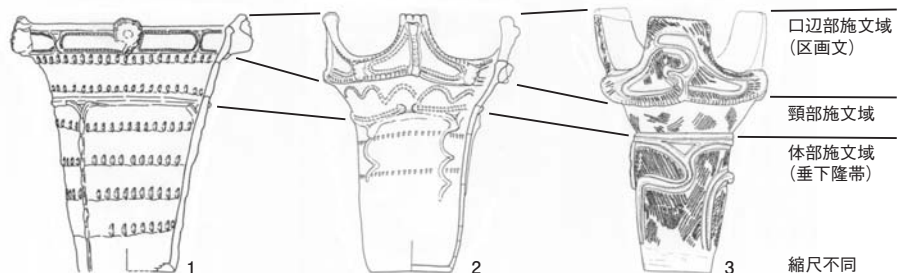
阿玉台式土器は、関東地方東部を中心に分布する中期前葉から中葉の土器である。千葉県香取市(旧香取郡小見川町)の阿玉台貝塚に多い土器を標準として設定された。「阿玉台式」は広く「オタマダイシキ」と呼ばれてきた。しかし標準遺跡は「アタマダイカイツツカ」と読む。阿玉台貝塚をはじめとする利根川下流域の貝塚を組織的に発掘調査し、阿玉台式土器の編年研究を推進した早稲田大学の故西村正衛教授は、「アタマダイシキ」の読み方に拘った。かつて阿玉台式土器の研究を志した者の多くは、西村の研究室を訪れ、彼が調査し、細別の基準とした利根川下流域の貝塚出土土器の観察を通じて、この土器の勉強をした。彼等は「アタマダイシキ」を使う。早稲田大学出身者や地元千葉県の考古学関係者の多くも「アタマダイシキ」と読む。アンケートをとってはいないが、現在では「オタマダイシキ」「アタマダイシキ」の読みが相半ばした状況と思われる。

中期縄文土器、なかでも東日本の中期中葉の土器は、立体的な装飾を特徴とするイメージが強い。ほぼ同時期中部・西関東地方の勝坂式土器、越後地方の火炎土器や東北地方南部の大木8a式土器はその典型である。これらと比較すると、阿玉台式土器は、中空の把手が発達せず、器面に無文もしくは地文のみの部分を多く残し、一見して簡素な印象を受ける。しかし、前半の一時期、混和材として雲母末を混入するため、金粉を鏝めたような外観を呈し、際立った特徴を醸し出している。

阿玉台式土器も、発生期と終末期では大きく様相が異なる。さらに同時期でも形態や装飾のバラエティーがある。しかし、文様構成、文様モチーフ、文様描出技法等において、共通する特徴もある。ここでは、標準とすべき土器を取り上げ、阿玉台式土器全般に通じる基本的な特徴を探り、阿玉台式土器とは何かを考える一助としたい。

深鉢形土器の代表的な器形は、体部が直線的にわずかに開き、頸部が外反し、口辺部が内湾気味に広がる。口辺部、頸部、体部の三帯に施文域を分割する。口辺部の施文域には隆帯によって区画文を配置する。平縁の土器では区画が楕円形となる(第1図1)。阿玉台式土器には、平縁と波状口縁の二者があり、後半になると波状口縁が数のうえで優勢になる。波状口縁では、区画が変形され、直角三角形となる(第1図2)。さらに、波頂部下の区画の接点部分が、渦巻文

などに転化する(第1図3)。阿玉台式後半期、霞ヶ浦北岸以外の地域では、波頂部下が渦巻文に転化したものが、圧倒的多数を占める。体部の施文域には、縦方向の隆帯文を配し、それ以外の文様は低調である。頸部の施文域は、多くは無文もしくは地文のみである。但し、前半期には、波状文などの簡素な文様を施文するものもある(第1図2)。隆帯の脇、特に口辺部区画文の内側には、竹管等の工具を沿わせることが多い。ただ工具を沿わせて線を引くものもあるが、多くは押し引きをする。時期により、細い竹管状工具を押し引きした「角押文」(第1図1)、幅広い竹管の背や篋状工具を押し引きした「爪形文」が用いられる。口辺部区画文、頸部素文、体部垂下隆帯文の文様構成と隆帯に沿う押し引きという阿玉台式土器の基本的な特徴は、前時期の五領ヶ台式からの系譜であり、勝坂式の古い時期にもみられる。



1.茨城県宮平貝塚

2.千葉県子と清水貝塚

3.栃木県御城田遺跡

第1図 標本的な阿玉台式土器

出典：1：茨城県宮平貝塚 小林謙一、2001、「茨城県宮平出土土器について(2)―阿玉台I・II式を中心に―」『民族考古』第5号  
2：千葉県子と清水貝塚 松戸市教育委員会、1978、『子と清水貝塚 遺物図版編1』  
3：栃木県御城田遺跡 芹澤清八、1986、『御城田遺跡(遺構・遺物実測図編)』栃木県教育委員会

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

## 目次

■阿玉台式土器	阿玉台式土器とは(1)	塚本師也 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイスバレット・サイト(第97回)	岡嶋隆司…3
■考古学の履歴書	良き師・良き友に恵まれて(第3回)	渡辺 誠 …2	■考古学者の書棚	『茨城の考古学散歩』	瓦吹 堅…4

## 考古学の履歴書

## 良き師・良き友に恵まれて(第3回)

渡辺 誠

## 3. 先輩と学友達

東洋史専攻に在籍しながら縄文研究に没頭することは、大きな矛盾であったが、当時真剣には考えていなかった。この矛盾が大きな壁となって立ちほだかったのは、卒業論文と修士論文の時である。しかしこのことは当然のことであり、十分に覚悟しておくべきことであった。その壁を乗り越えられたのは、修士論文に抜歯風習の研究をテーマにしたことであった。詳しくは後に記すことになるが、当初は貝塚や低湿地遺跡への関心を強くし、江坂先生や諸先輩のお陰で、広い視野で研究する方向性が次第に育まれてきた。

もっとも身近な先輩は、考古学の基本的な技術を叩きこんでくれた笹津備洋氏であった。そして可児弘明・近森 正氏であったか、どの方も当時の東洋史の雰囲気や反映して、文化人類学・民俗学にも造詣が深く、その広範な知識の獲得について、江坂先生は言葉を変えて、雑学をせよ、と強く言われた。各地で沢山のいろいろな種類の遺物を見ることや、乱読の勧めなどであった。それらをこまめにフィールド・ノートに実測図などとして残すことも指示された。そのこまめな先生のノートの中から、独鈷状石器の実測図を多数写させて頂いたことは、今ではなつかしい思い出である。

先輩のことに話を戻す。3氏のうちでもっとも学年が近いのは、近森 正氏である。先に記した久保ノ作洞窟の発掘の半年後に、小名浜町(現いわき市)寺脇貝塚の発掘が江坂先生によって行われ参加させて頂いた。この時近森氏は、ときどき見つかる小型のきれいな礫に注意をはらって集めていた。縄文人も目的があって集めていたのかも知れない、そして民俗例では、カゴ類を編むのに使っているところがあると教えてくれた。このことは私の今日の編物石研究の最初の遠いきっかけである。

可児弘明氏は、中公新書に名著『鵜飼』があるように、漁業史に詳しい方だった。

笹津備洋氏は、郷里の静岡県沼津市にもどっても、東名高速道路関係の事前調査がある時はよく呼んでくださった。そしてある時、本当に考古学を続けるつもりなら、厳しい発掘の現場でしごかれなければならないと、登呂の望月董弘氏達と発掘していた静岡県富士市山王遺跡の発掘に参加させられた。望月氏は酒の飲み具合で体調が分かるから、メンバーの飲み具合をよく見ておけと指示され、見落としのため、翌朝トイレの掃除を何度もやらされたのはきつかった。

小野真一・瀬川裕市郎・若月正巳・向坂鋼二・磯部武男・植松章八氏などの静岡県勢とお付き合い頂くようになったのもこの前後であり、笹津氏のおかげである。

これらの静岡県下の遺跡や九州の貝塚の発掘と一緒に参加し、次第に無二の親友となってきたのは、東洋史の同級生高山 純氏である。そして国史の鈴木公雄氏、西洋史の赤沢威氏がいた。大学院は東大に行った赤沢氏には、個人的な人面装飾付土器の研究や、愛知県史の資料調査などで、東大の総合博物館ではよくお世話になった。

また前嶋信次先生に師事していた家島彦一氏には、最近の方が教えられることが多くなった。家島氏は船の研究もされていて、韓国の新安沈没船がバイキングの船と同じだと大きな話題になった時、アラビア・アフリカにすらそんな船はなかったといわれ、一緒に韓国旅行した時にみた高麗船にそのルーツがあると教えてくれたのである。お陰で蒙古襲来の考古学的研究に、私なりに新しい進展を持つことができた。

## 4. 野口義麿氏から滝沢 浩氏へ

先の3先輩の上には野口義麿氏がいた。武勇伝の多い方であり、年の離れた後輩に面白おかしく聞かせてくれた。あまりに年が離れていたため、お会いすることは少なかったが、時々国立博物館へ伺った。そして氏の蛇体装飾付土器の研究は、後に人面装飾付土器の研究を始めるに際し、とても参考になった。

慶應の加茂遺跡の丸木舟の発掘は同氏からの情報に基づくものである。以後丸木舟の発掘は、慶應の看板テーマとなっていく。旧大宮市膝子遺跡の発掘が、その延長上にあることは言うまでもない。さらに1962年には千葉県八日市場市多古田遺跡の低湿地遺跡の発掘が行われ、参加した。これで私の研究方向は一段と明白になってきた。

当時雄山閣の新版考古学講座が進行中であったが、なぜか大先輩のピンチヒッターとして、縄文前期の東日本を書くことになった。文化圏と植生図を初めて重ねたのはこの時が始まりである。しかしこのことが大きく展開したのは後日話であり、当時は石鏃と石槍を、クマ猟とシカ・イノシシ猟とに对比させたことで、八幡一郎先生から褒めて頂いた。八幡先生は江坂先生の先生であるから、私にとっては大先生であり、格別に嬉しかった。1969年のことである。

またこれにすぐに反応してくれたのは、滝沢 浩氏である。ポイントとナイフ形石器の関係は石鏃と石槍の関係と同じで、立地条件の上でも納得できることであると言われた。ある時東大の人類学教室へ山内清男先生をお訪ねしたところ、廊下に滝沢氏がいて、出版社の人が来ているからすぐには会えないので、喫茶店に行くことになった。そして話はもっぱら狩猟具と獲物の関係に集中し、ナイフ形石器は石鏃と同じという意見の根拠として、使用痕が長軸方向に顕著であること、決してナイフとされる刃には並行していないことを強調されていた。

これで二人は盛り上がり、結局山内先生には会わずじまいであった。後日、私を忘れるほどの楽しい話だった様だねと、山内先生から冷やかされたものである。以来40年もたつて、ようやく滝沢氏の意見が若い研究者に評価

## 略歴

昭和13年11月18日	福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
昭和32年3月	福島県立磐城高校卒業
昭和33年4月	慶應義塾大学文学部入学
昭和43年3月	同上大学院博士課程修了
昭和43年4月	古代学協会平安博物館勤務
昭和54年8月	名古屋大学文学部助教授
平成元年4月	同上教授
平成14年3月	同上定年退職、同上名誉教授
平成15年4月	山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
平成18年7月	日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

されてきている。しかしその当時誰も見向きもしなかったし、使用痕の研究もなぜかエンドスクレイパーに集中し、主要狩猟具であるかもしれないナイフ形石器については完全に無視されていた。今思い出してもおかしなことであり、滝沢氏の悔しさがよくわかる。上に立つ先生は意見の違いを超えて、客観的なデータを心がけるべきであったし、意見が合わなくても、研究をやめたくなくなるようなことにはしてほしくなかった。

そして研究者は弓もひいたことのない人ばかりだという私の批判に対し、君が和弓なら、私は洋弓をやるといい、庭に古壘を吊るし、盛んに矢をぶち込んでいた。その矢の一本一本に、悔しさが浸みこんでいたことであろう。鎮魂のために書き残す。

102号 考古学の履歴書「良き師・良き友に恵まれて」第2回の文中で「近藤 正氏」とありますが「近森 正氏」の間違いでした。深くお詫び申し上げます。

隔月連載です。次回は石井則孝先生です。

## Jレーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 97

#### 荒神島遺跡群 ～ 香川県香川郡直島町

岡嶋 隆司

荒神島は、東の香川県直島と西の岡山県玉野市向日比犬尻鼻との間に位置する南北約0.8km、東西約1.1km、周囲約4kmの無人島です。行政的には香川県に属しますが岡山県玉野市までは最短距離で約1.2kmと指呼の距離です。

この島は、後期旧石器時代から奈良時代までの遺物が確認されていますが僅かながら中・近世の遺物も確認されています。特に石器の散布地としては古くから知られていたように故杉野文一氏により断片的な紹介がされています。

考古学的調査は、1960年・1981年の岡山大学と1971年の直島町と香川県教育委員会による共同の確認調査が行われています。岡山大学の調査は、旧石器の分布調査のほか、海浜部での製塩遺跡と岬上の古墳、谷部に位置する2箇所祭祀遺跡で行われ、直島町と香川県教育委員会の共同確認調査は、祭祀遺跡で行われました。岡山大学の成果は、祭祀遺跡A地区が5世紀末から6世紀初頭を中心に、イ地区が奈良時代を中心としたことが確認され、手捏土器、土師器、須恵器、剣・刀・工具・鏃等の鉄器、滑石製有効円盤・滑石製白玉・勾玉などの祭祀用石製品などが出土しています。製塩遺跡は、製塩土器・須恵器・土師器・飯蛸壺などが出土し、7～8世紀のものと考えられています。古墳は、二重の列石を持つ方墳で頂部に箱式石棺が1基確認さ

れ、墳丘周辺にも箱式石棺が10基ほど確認されました。年代は、出土した精製鉢により弥生後期末葉～古墳時代初頭と考えられています。同時期の二重列石を伴う方形墳墓が備讃瀬戸の海浜島嶼部に展開していることから今後注意する必要があるでしょう。

1990年頃より竹内信三、小野 伸、岡嶋などにより旧石器を中心とした採集作業が個別に行われるようになりました。その内、竹内と岡嶋の表採資料を基にサヌカイト製のナイフ形石器・尖頭器・楔形石器・石核・剥片、ハリ質安山岩製細石核原形などが報告されています。

2007年11月26日には、島の南側中央の高台に位置する縄文時代後期土器散布地の地形測量調査が岡山理科大学富岡研究室を中心に行われました。また、2010年5月9日には同じく富岡研究室を中心島の南東に位置する二左右衛門の鼻で新たに発見された小古墳2基の測量調査が行われました。採集された須恵器片から6世紀後半と考えられています。詳細は近々、報告書として刊行される予定です。

岡山大学が調査した祭祀遺跡イ地点には墓石を伴う近世墓が所在し、付近からは、キセルやハサミなども見つかっています。また、他の尾根上でも江戸後期と考えられる陶器製の鉢も採集されており、近世段階でも人々の営みがあったことがわかります。

最後にこの島がたどってきた環境について触れてみたいと思います。この島は、東側に位置する直島の精錬所による煙害で島の殆どが禿げ山となり、表土も雨が降る事に流されて遺物が洗い出されるようになりました。故近藤義郎先生は、1995年に「島は前回訪れた1981年に較べてもひどく荒れていた。北向きの浜近くに形成されていた前方後円墳時代7～8期の祭祀遺跡は、おそらく盗掘と流土のためほとんど形跡無く崩れていた。」と書かれています。その後、場所により松などを中心として少しは緑が回復しましたが1998年の山火事により島の緑は壊滅的となりました。以降、風雨により島全体の浸食が進み、遺物の流失が一層激しくなっていました。2004年9月の台風16号の被害は更に深刻で島全体が一皮剥けたように小さくなって部分的には包含層が消失していました。

現在、NPO法人などにより植林が島の各所で行われて一見良い方向に進んでいるように見えますが深刻な問題も起こっています。写真1は、祭祀遺跡イ地点への植林の状況ですが須



写真1「散乱するのは全て須恵器片」



写真2「島の南側、縄文後期土器散布地遠景」

患部の包含層を掘り返して行われており、この状況は島の各所で認められています。風雨による浸食だけでなく人為的な破壊も脅威の一つです。また、植林する植物も在来種でなく外来種のエニシダなどで行われており、自然環境の面からも好ましくない状況です。以上の状況については、2010年4月17・18日に開催された考古学研究会第56回総会にてポスター

セッションで報告しました。現在、荒神島遺跡群以外にも岡山市犬島貝塚や玉野市長崎鼻遺跡、その他海浜部の製塩遺跡など風雨や波などで浸食が進んでいる遺跡が多い状況です。今後も沿岸部や島嶼部の遺跡について注意する必要があります。  
※次回のマイ・フェイバレット・サイトは片桐千亜紀さんです。

## 考古学者の書棚

### 「茨城の考古学散歩」

茨城県考古学協会編(2010)

瓦吹 堅

茨城県内の高校から東京の大学に進学したのは1966年だった。それ以来、考古学研究室に出入りしながら遺跡の発掘調査にも彼方此方参加し、それなりの経験をした後、県内の調査にも参加するようになった。調査に参加すれば、様々な時代の遺構や遺物についての知識や調査技術が必要で、それらは先生方や諸先輩が調査の中でいろいろ訓練してくれたし、自分なりに工夫しながら覚えた。また先輩達が薦める概説書や報告書なども、昼食代を削って購入した。そんな中、勉強のため県内外の著名な遺跡を見て歩こうとすると結構苦労した事を覚えている。我々の学生時代から最近まで、都道府県ごとの遺跡についての情報は「遺跡地名表」的なものしかなかった。

最近、考古学マニアというか、考古ファンが実に多い。それもそのほとんどが一般人の老若男女である。著名な遺跡の発掘などのニュース報道を見ると、説明者を取り巻くように聞き入るファンの多いこと。

このような時代、考古学的なガイドブックの刊行が目につくようになった。かつて欲しかった遺跡の紹介本である。専門書ではないが、専門家も一般人も遺跡の概要を知るというスタンスでのガイドブックとなった。

茨城県考古学協会は設立30周年を迎えた。30周年の記念としてどのような事業がよいか協議がなされ、一般の県民が郷土の遺跡について平易に理解することができる県内遺跡のガイドブックの作製が目標である。そのガイドブックは、遺跡の紹介を通して、埋蔵文化財の価値や郷土の誇りとしての遺跡の活用を促進することも目的とし、本文382ページのA5版『茨城の考古学散歩』となった。散歩という文字からは、楽しく遺跡を散歩するというイメージが湧いてくる。

例言には、「県内において発掘された遺跡の出土遺物、時代、規模、性格、地域性などを考慮し、重要かつ著名な遺跡を収録した」と川崎純徳会長のことばが記されているように、遺跡の位置や特色を明記したものである。

本書では茨城県域を行政区画と同じように県央・県北・鹿行・県南・県西の5地区に分け、300遺跡ほどを紹介している。掲載された遺跡は、原始・古代から近世の遺跡で、開発の波に洗われて消滅した遺跡も数多く含まれ、その調査の成果が収録されている。

紹介されている遺跡を地域ごとに見ると、県央68、県北39、鹿行29、県南96、県西63と地域によっての多少はあるが、その数は開発行為の多寡を如実に表し、首都圏に近

い県南部の遺跡が多く紹介されている。編集員は32名の多人数で、それぞれの遺跡は調査に関係した120人が執筆している。

ガイドブックの目的は、単に遺跡探訪の手引きとなるだけでなく、考古学理解にも繋がるものでなければならないが、本書は易しく遺跡を紹介することによって、身近にある遺跡の価値を一般市民が認識し、さらに自分の目と足で訪ねることによって埋蔵文化財について理解するためのものであり、今後の遺跡の活用についても再考を投じるものとなっている。

各地区の遺跡は、位置・調査年・調査結果・遺跡の性格・遺物の保管場所・参考文献の順で記述され、位置図の掲載は探訪の重要な情報である。また、出土した遺物の保管場所は各市町村などで異なるが、博物館や資料館の施設での収蔵状況ばかりでなく、展示などの情報の入手にも役立つものである。

文末には考古学関係の用語解説があり、難解な用語が多い考古学の世界を、一般の人達が理解するための手助けとなっている。さらに、文中で紹介されていた遺物の保管場所の施設について、所在地と電話番号が明示されているのはうれしい。

本書は、遺物探訪をする一般の人達だけの利用に止まらず、研究者の研究活動にも活用されることを願い、一読をお勧めしたい一冊として紹介した。



## アルカ通信 No.104

発行日 2012年5月1日  
 発行人 角張淳一  
 発行所 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp